ヤドリギの王

綿峰一斎

深い藪の奥の奥。背高の木々が寄り集まってできた城の玉座に収まる老人の頭に、ヤドリギの枝を編んで作られた冠が載っていた。だが、彼はすでに年老いていて、もはや枯れ木の如くであった。このままではいずれ朽ちてしまうだろう。王の死は森の死。森は新たな王を求めていた。

1
森の裾で、若き双子が寄り添いながら暮らしていた。見た目そっくりだが中身は全く違う兄と弟。猛々しい兄と、心優しい弟。二人は森が新たな王を欲していることを知り、木々とそこに住む動物たちのために我こそがと思い立った。数年前に死んだ父親が森の王から賜ったという剣とマントを分け合った二人は、各々世界を巡り見聞を広めるために旅に出た。良き王となるには、そういった知識が必要だと思ったからだ。
それから一年と一月。兄弟はいずれ劣らぬ立派な若者となり、それぞれ森へ戻るために旅を急いでいた。もう寒い、冬のことだった。剣を手に旅をつづけた兄は三つもの向こう傷を得ていたが、マントを羽織って歩んだ弟はかすり傷一つとて負うことはなかった。
兄と弟。どちらが先に戻ってきたのか……貴方が決めてよい。決まったら、２へ進め。
その前に、剣について知っておきたいなら１９へ。マントのことを知りたいなら１８へ。

2
今ここに、一人の若者が懐かしき森へと辿り着いた。王の前に出ることを望み、彼は単身森の中へと入っていく。ともすれば道を見失ってしまいそうな藪の中を進んでいくと……毛の薄くなった老いた熊が獣道の脇にうずくまり、凍えているのに出会った。
この若者が双子の兄であるのなら１６へ、弟ならば１３へ。それぞれ進め。

3
老いた王は蜜を運んできた若者を気に入ったようだ。だが、彼はため息をついた。
「優しさはもちろん、若く強く、しなやかな者よ。だが……残念じゃ」王のひび割れたな指が若者の纏うマントを指さした。
「二つ虹の証が無くては、森の後継者として認めることはできぬ」
８へ進め。

4
若者は王の顔を見て驚きを隠せなかった。それは愛しき弟のそれだったのだ。しかし、その口から出るのは若々しい身体に似つかわぬ干からびた声だった。
「我はすでに若き身体を手に入れた……もはや戴冠の儀は終わったのだ」
「……誰だお前は！　弟を返せ！」
だが、弟は兄の言葉に答えることはなかった。８へ進め。

5
王はマントに二つ虹の証を認めた。「これこそ我が跡を継ぐ者也！」
森は新たな王を迎えることになり、四本のヤドリギの枝で編まれた冠が用意された。若者の頭に冠が載せられると同時に、古き王は朽ちて崩れ落ちた。彼はその身体を乗り越えて玉座に向かい、腰を下ろす……若く力に満ちた若者は、きっと良き王となるだろう。めでたしめでたし……
もう一人の若者がいまだ旅から戻っていないのであれば、彼は月が代わる前に帰ってくるだろう。その場合のみ２へ進め。
だがもしも、牢に囚われているのであれば……その者の身体に刻まれた傷の数と同じパラグラフへ進んでもよい。

6
「蜜かい？　まあいいよ」
しばらく話をした後、蜂は言った。最初こそ頑なに拒んでいたが、若者の穏やかさに蓄えを分けてくれる気になったのだ。
若者は丁寧に礼を言うと、蜂からもらった巣の一部を持ち運ぶために、再びマントを真っ二つに切り裂いた。溢れんばかりの蜜をこぼさぬように気を付けながら、彼は王のもとへと急ぐ。１５へ進め。

7
葉の落ちた木々の間を縫い、カーテンのように垂れ下がる蔓草をかき分けながら若者は森の奥へと進む。やがてひときわ大きな木のウロの中に立派なハチの巣があるのに気づき、彼は立ち止った。巣にはやはり巨大な蜂が覆いかぶさっていたが、そこには琥珀色の蜜があふれんばかり。これを持参すれば、王の癒しとなるに違いない。
今現在、森にいる全ての若者の身体に刻まれた傷の数に、この蜂の足の数を加えることで得られる値のパラグラフへ進め。
もしもわからないということならば、その時は１７へ進むよりない。

8
「この者を根の牢獄へ！」
証を持たずして王の前に出るは許されざる行為。若者は哀れ、生涯出られぬ牢の中へ。
もしもここで血を分けたはらからと再会できたのならば、それはせめてもの慰めとなろう。
だが、もう一人の若者がいまだ旅から戻っていないのであれば、その者は月が代わる前に帰ってくるだろう。その場合のみ２へ進め。

9
蜂にとっても、この蜜は冬を乗り越えるために必要なものだった。蜜を差し出すことを拒んだ蜂に対し、若者は刃を向ける。戦いは激しく、蜂は三分の二の足を失うほどだった。若者もまた、七回にわたって毒の針で穿れていた……だが、最後まで立っていたのは彼のほうだった。
鉢の身体を巣から引きがした若者は、その蜜で剣の鞘を満たした。そして抜き身の刃をつかんだまま、さらに森の奥へと踏み込んでいく……やがて彼は、王が住まう高き木々の聖所へとたどり着いた。
王の冠に使われている枝の本数を知っているのなら、その数のパラグラフへ進め。知らないのなら１４へ。

10
実は、あの戴冠式は王が新たな身体に根を下ろす儀式に他ならなかった……しかし、蜂の死毒が混ざった蜜が寒さに弱った王の身体を蝕み、その力を大きく削いでいた。王の力は若々しく精力にあふれた肉体の前に敗れ去っていたのだ。
ヤドリギの支配を受けることなく、新しい王は兄を牢から救い出した。二人は以前のように力を合わせ、森を護り続けるだろう……

11
老いた王は蜜を運んできた若者を気に入ったようだ。だが、彼はため息をついた。
「優しさはもちろん、若く強く、しなやかな者よ。だが……残念じゃ」王のひび割れたな指が若者の纏うマントを指さした。「二つ虹の証が無くては、森の後継者として認めることはできぬ」
８へ進め。

12
しかし蜂はすでに死んでいた。どうやら何者かと戦ったらしく、その身体は傷ついていて、何本かの足が失われていた。
若者は蜂の死を悼み、祈りをささげると、巣の一部を持ち運ぶために再びマントを真っ二つに切り裂く。溢れんばかりの蜜をこぼさぬように気を付けながら、彼は王のもとへと急ぐ。１５へ進め。

13
心優しい若者は、躊躇することなく大事なマントを真っ二つに切り裂いて熊に与えた。
「これで風をしのぐといい」
熊は感謝しきり。礼として知っていることを教えてくれた。
「この冬はかつてなく厳しく、我らが王もいよいよ命運尽きたに相違あるまい。今や身体を温め、心安らかに枯れ行くための蜜酒を求めていると聞く」
７へ進め。

14
若者の姿を見た王は、怒りを隠さずに言い放った。
「二つ虹の証を持たぬ者よ、されどその剣に斬られた鳥や蜂の訴えは我に届いておる！」
抵抗むなしく若者は取り押さえられ、その剣と、蜜をたたえた鞘は取り上げられてしまった。いかに鋭い刃といえど、無限に再生する樹々の前には無力だったのだ……。８へ進め。

15
次第に梢の緑が濃くなっていく……届く王の力が強いのだ。果たして、やがて視界にひときわ高くそびえる木々が集まっているのが見えてきた。森の王が座する聖所だ。ついに彼は、目的地にたどり着いた。
身に着けたマントの切れ端の模様から数字を読み取り、最後に切り裂く直前に表れていた数を加えよ。二桁になった場合にはそれぞれの桁を足し、一桁の数字となるまで続ける必要がある。そのうえで、マントが最終的に幾つに分割されたのか、その数をさらに足して得られた値のパラグラフへ進め。
わからない、あるいは残った模様からは数字が読み取れないというのであれば、１１へ進まなければならない。

16
荒々しき若者は、剣を抜き頭上を飛ぶ鳥を切り落とした。「焼いて食うといい」
熊はその気性に恐れを抱きながらも、礼として知っていることを教えてくれた。
「この冬はかつてなく厳しく、我らが王もいよいよ命運尽きたに相違あるまい。今や身体を温め、心安らかに枯れ行くための蜜酒を求めていると聞く」
７へ進め。

17
永らく外の者が踏み入ることを拒んできた迷いの森。冬の寒さが多少枝葉を枯らし、木々の力を奪っていたとて、王が生きている限り森の魔力は健在だった。若者はいつしか己がどっちを向いているかすらもわからなくなり、やがて力尽きる……

18
古い文様――剣に絡みつく蛇――が刺繍された年代物だ。剣と蛇は左右対称に二つ配置されていて、その鱗は七色に彩られている。分厚く丈夫で、作られてから永い時間がたっていると思われるのに、綻び一つない。１へ戻れ。

19
名も知れぬ古の名匠の手によるもので、刃は粘りがあり鋭く、およそ何でも貫けそうと思える。見た目こそ無骨だが、その刀身を収める鞘の強靭さたるや想像を絶するばかりだ。
１へ戻れ。

切ル